

柴は燃え尽きない
——トマス・クランマーの殉教

出エジプト記 3 : 2



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年3月20日

大齋節第3主日

聖光教会にて

今日の旧約聖書に、モーセが燃え尽きない柴を見た、ということが記されていました。柴が燃え尽きないというのは、神の愛が燃えて燃え尽きない、ということを示しているのではないのでしょうか。

今日は、神の愛に燃やされて生涯を閉じた一人のことをお話しします。それは16世紀、今からおよそ500年前に、聖公会というわたしたちの教会の土台を築いた一人、トマス・克蘭マーという人です。

祈祷書の12頁を開いてみると、教会暦の小祝日が記されています。その中に

「3月21日 主教トマス・克蘭マー（1556年カンタベリー）」と書いてあります。明日3月21日は、トマス・克蘭マーの殉教の記念日です。彼は、16世紀、第69代カンタベリー大主教として英国（イングランド）の宗教改革を推進しました。克蘭マーの働きと死があって、わたしたちの聖公会の信仰と礼拝は基礎を据えられ、そうしてわたしたちのところまで受け継がれてきました。

トマス・克蘭マーの最も大きな働きは、祈祷書を編集し発行したことです（1549、1552）。それまでの礼拝はずっとラテン語で行われていて、一般の人には何が語られ何が祈ら

れているのか理解することができませんでした。礼拝は、参加者それぞれが自分のわかる言葉で、まごころからささげてこそ礼拝です。彼が編集した英語の祈祷書によって、一部の聖職者だけではなく一般の信徒が自分の言葉で信仰生活を深めて行く道が開かれました。国王ヘンリー8世の後を継いだエドワード6世の時代です。

克蘭マーが書いた「祈祷書への序文」(1549)には、このように記されています。

「このイングランドの教会では、長年、礼拝が人々の理解できないラテン語で読まれてきた。ただ耳で聞くだけで、彼らの心も霊も精神も、それによって教えられ養われることがなかった。」

礼拝を、皆がわかるものにしなければならない。聞いて理解して、わかって唱えて、わたしたちの心と霊と精神が慰められ、養われて、愛に燃えるようになる——礼拝はそのようであるべきだ、と克蘭マーは考えました。そのために用意されたのが祈祷書なのです。

祈祷書にはたくさんの聖書の言葉が含まれています。これは克蘭マーの願いでした。祈祷書によって皆が聖書の言葉に触れてほしい。彼は聖書日課を定めて、人々が命の言葉である聖

書にできるだけ触れていけるように工夫しました。

たとえば 150 ある詩編全体を毎月 1 回唱えられるように、毎日の朝夕に割り振りました。今から 40 数年前、わたしが神学生だった頃、神学校ではそのとおりに実行していました。朝夕の礼拝で、ひと月で詩編全部を唱える。忠実に実行すれば、1 年間に 12 回、詩編全体を読むことになります。日本聖公会でも文語の祈禱書では、巻末に収められた詩編に「五日早禱」「六日晚禱」のように印刷されていました。

話を戻します。祈禱書が発行されてまもない 1553 年、国王エドワードが亡くなり、メアリーが即位しました。メアリーは宗教改革を憎み、改革路線を否定して教会のカトリック復帰を進め、改革を進めた者たちを迫害しました。宗教改革の中心的指導者であった克蘭マー大主教は聖職位を剥奪され、彼が進めた改革路線が誤りであったことを認めるように迫られました。彼は脅迫に屈して、自分がこれまで進めてきたことが誤りであったとする転向声明文を書いて署名しました。しかしそれでも彼は赦されず、火刑に処せられることが決定されました。

処刑される前の日、3 月 20 日、彼は召し使いの少女こう頼んだそうです。

「わたしのために祈ってほしい。悪い司祭の祈りよりも、

善い信徒の祈りのほうが重要だとわたしは思う」。

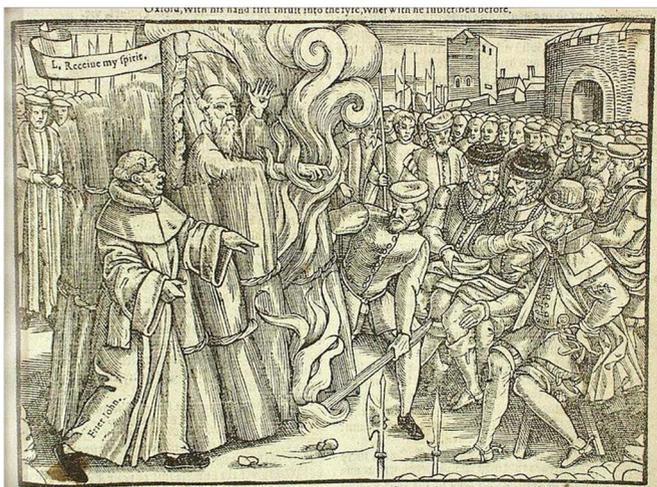
メアリーが即位して3年後の1556年3月21日（今から466年前）、衆人環視の中で彼を火刑にする儀式が行われました。克蘭マーの大罪を弾劾する説教が行われました。そして克蘭マーは自分の重い罪を認め、刑に服する言葉を述べるはずでした。ところが、彼は突然、予定されていなかったことを語り始めたのです。

「自分は死の恐怖のために、自分の良心に反して転向声明文を書いたのだ」。

人々の怒号と興奮の中で彼は語りつづけました。彼は鎖で柱に縛り付けられ、火が付けられました。彼は燃える火の真ん中に自分の右手を突っ込んで言いました。

「恥ずべき右手、この手が罪を犯した」

自分の良心を偽ってカトリック転向に署名したその手。その手が自分の不真実そのものを示していたのです。



そして最後は、あの最初の殉教者ステパノと同じように天を仰いで、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」（使徒言行録 7：59）と祈り、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」（7：56）と言いつつ、死んでいったといわれます。

このトマス・クランマーの祈りと働きと殉教の死があって、聖公会という教会が形成され、今日のわたしたちに至ったのです。ヘンリー8世の名前は忘れてもよい。しかしトマス・クランマーの名と働きは、わたしたちの心に刻まなくてはなりません。

わたしたちの祈祷書は、クランマーの祈祷書が元になり、改訂が重ねられて今日に至ったものです。祈祷書には、だれもがよく祈り、神を知り、信仰を深めることができるようにと願った、そして心を一つにして礼拝することを願ったクランマーの切なる願いがこめられています。祈祷書を用いて自分の信仰の養いとすること、そして声と心を一つにして共に礼拝することを大切にしたいと願います。

クランマーは信念を貫徹した殉教者というのではなく、恐れ、迷い、転向を誓うなど、人としての弱さを持った人間でした。けれどもその弱さの中に神が働かれました。彼が火に

包まれたとき、神の愛の火がもっと強く彼を包んでいました。やがて彼の死とともに火は消えたけれども、燃えて燃え尽きない神の愛の火は消えませんでした。神の愛の火は、今もわたしたちのために燃えています。

わたしたちも弱く、過ちを重ねるかもしれません。けれども良心の痛む者でありたいと思います。わたしたちの弱さの中に、神さまが働いてくださいますように。そしてほんとうに大切なときに、はっきりと信仰を表すことができますように。

英国教会の祈祷書に載っている祈りをささげます。

**「3月21日 トマス・クランマー カンタベリー大主教、
宗教改革殉教者」**

憐れみ深い神よ、あなたはあなたの僕トマス・クランマーの働きをとおしてあなたの教会の礼拝を新しくされました。そして彼の死をとおして、人間の弱さのうちにあなたの力を現されました。どうかあなたの恵みによってわたしたちを強め、常に霊とまことをもってあなたを礼拝するようにしてください。そしてあなたの永遠のみ国の喜びに至らせてください。わたしたちの執り成し主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン